

鳥取市域の城郭～陣城・景石城・鹿野城など

西 尾 孝 昌

昨年から、鳥取城・秀吉の陣城群の調査と並行して、市域の近世城郭である高石垣をもつ景石城・鹿野城等の縄張り調査を実施している。調査担当は、鳥取市教育委員会文化財課(坂田邦彦)と筆者である。

今回は、秀吉の陣城群の内未調査であった中ノ郷中学校北側の陣城・八幡山の陣城・飛田城と景石城・鹿野城の縄張り的特徴について報告する。なお、天正9年(1581)段階で毛利方の付城であった大崎城についても検討する。

1. 秀吉の陣城群

(1)八幡山の陣城(伝・三好信吉の陣所跡)(第1図)

城は八幡池の北東、伝羽柴秀次の陣と約250mほど離れた尾根続き、標高56.1mに所在する。

主郭1は方形土壘囲みで、東西約13m・南北約20mを測る。南辺は土壘が破壊されているようである。土壘の規模は、北側で幅4.5m・高さ0.6m、西側で幅4m・高さ0.7m、東側で幅3.5m・高さ0.6mを測る。主郭の北東隅に、幅約4.5mを測る外枱形虎口を構築している。

主郭1の北側に東西約19m・南北約11mを測る平坦面2があるが、現在2基のテレビ塔が建っており、城郭の曲輪であったかどうかは不明である。

この陣城は、現在確認されている秀吉の陣城群の中で、外枱形虎口を有する唯一の遺構である。指呼の間にある伝羽柴秀次の陣にも、枱形虎口は構築されていない。

(2)中ノ郷中学校北側の陣城(第2図)

城は、中ノ郷中学校(浜坂1丁目)北側の丘陵、標高94.8mの砂丘上に所在する。山裾の中ノ郷中学校グラウンドとの比高は、約90mを測る。城域は東西約110m、南北約100mを測る。

標高94.8mに位置する曲輪1と曲輪2で主郭部を構成している。曲輪1は20×13m、曲輪2は22×17mを測り、曲輪中程の仕切り土壘は幅4m・高さ0.5~0.7mを測る。

曲輪2の北東隅から東側には幅4m・高さ0.3~0.5mの土壘が延びている。曲輪3は22×24mを測り、北東隅に幅約1.5mの平虎口を設けている。曲輪3と曲輪2との段差は約5~6mを測る。曲輪5は45×23mほどあり、南東隅に虎口を構築しているようである。曲輪3と曲輪5との段差はわずかで0.5mもない。曲輪7はの切岸は明確ではないが、北側の土壘は規模が大きく幅7m・高さ0.6m・長さ32mを測る。曲輪5と曲輪7との間の仕切り土壘は幅9mほどある。

また主郭部北側約5m下には、2段の帯曲輪を構築している。曲輪4は幅7m、曲輪8は幅6mを測る。曲輪4・曲輪8の北側には、堀切は構築されていない。

城は主郭部を幅広い帯曲輪で囲繞し、帯曲輪の両端(東側と西側)に土壘を設けて守備を固めている点に特徴がある。城は南側(千代川)方向を向いており、土壘や虎口の使い方からすると在地系の城郭ではなく、秀吉の鳥取城攻めの陣城群の一つとみられる。

(3)飛田城(鹿野町河内)(第3図)

飛田城は河内川右岸、鹿野町河内(上条)集落東側、東から西に延びる尾根先端部の標高約310mに位置する。集落との比高は約90mを測る。

飛田城はほぼ3郭からなり、それぞれに土壘と堀を方形に巡らせているのが特徴的である。城は背後(東側)の尾根筋からの攻撃に対して堀と土壘を構築して対処し、前面(西側)の城道からの攻撃には曲輪1と曲

輪3で攻撃して守備する縄張りとなっている。

曲輪1は東西約33m・南北約42mを測り、曲輪の北東・東・南・南西側をコの字状の土塁と堀が取り囲んでいる。土塁は幅約4.5~5.5m・高さ1.5~2mを測り、堀は幅2.5~4.5mを測る。曲輪1は南側は3段程に分かれているが、北側は緩斜面となっている。虎口は谷側(西側)ではなく、北東隅の曲輪2をめぐる堀との間に設けられているようである。また曲輪1の南西側には、小規模な堀切と曲輪4(10×6m)を構築している。

曲輪2は東西約16m・南北約25mを測り、北側から東側にかけて鉤状の土塁と堀を巡らせている。土塁は幅約6m・高さ1.5~2mを測り、堀は幅約6mを測る。また曲輪の南側には、土塁間に入る幅約4mの平虎口を構築している。

曲輪2の約4m下には曲輪3が設けられており、北側から西側にかけて土塁と鉤状の堀が巡らされている。土塁は小規模で幅約1.5~2m・高さ0.6mを測り、堀は幅4~4.5mを測る。

飛田城は3郭とも方形の土塁と堀で囲繞されており、鳥取城周辺の秀吉の陣城群とは縄張りを異にする。しかし在地系の縄張りではなく、明らかに織豊的な手法で新規築城した陣城であることは間違いない。飛田城の対岸の高所(標高466m)には7条からなる畝状堅堀をもつ在地系の荒神山城があるが、その縄張りは飛田城とは大きく異なる(『鳥取県中世城館分布調査報告書第1集(因幡編)』)。

飛田城は位置的に美作国方面から鹿野に入るルートに所在し、秀吉が天正8年5月上旬鹿野城を攻略した時(羽柴秀吉書状『利生護国寺文書』)の陣城と思われる。

(4)西桂見の土塁(第4図)

桂見の土塁については、既に『鳥取城調査研究年報』(第4号)で美術館建設予定地の北側(「北側土塁」)について調査報告している。今回はその南側(「南側土塁」)について調査成果を報告する。

南側土塁は、天文館跡から南側の尾根筋に約1.5kmほど続いている。その詳細を報告することは出来ないが、各地点の主要な遺構を紹介する。

< A 地点 >

天文館跡の北側尾根には土塁は構築されていないので、北側土塁とは連続していなかったようである。天文館跡地からB地点までの土塁は、幅4.5m・高さ1.2~1.3mを測る。

< B 地点 >

標高76.8mのB地点は北側に土塁をもつ曲輪(9×20m)となっており、その東下斜面に4条の土塁が延びている。

< C 地点 >

C地点には2段の曲輪が設けられており、下段の曲輪の西側には3条の土塁が構築されている。土塁の間は幅4~6mの堅堀状を呈しており、西側を意識した虎口ではなかろうか。上段の曲輪から「風の広場」までは直線的な土塁(幅4m・高さ1m)が続く。

< D 地点 >

D地点は「風の広場」と称する展望台が設置されている。展望台設置以前の地形は不明であるが、現状では尾根筋と谷筋に土塁が構築されており、丁度緩斜面を囲い込むような形を呈している。軍勢の駐屯地として利用されたのかも知れない。

< E 地点 >

一部に曲輪状の箇所があるが、概ね尾根筋にそって土塁(幅3~4m・高さ0.6~1m)が連続している。

< F 地点 >

F地点には、3段の曲輪や土塁、堅堀などがみられる。中程の広い曲輪は東西23m・南北33mを測り、西側斜面に土塁と堅堀(幅5m)、南斜面に約40mを測る土塁(幅3.6m)を設けている。下段の曲輪は18×16mを測り、西側に2条の土塁を構築している。上段の曲輪は13×19mを測り、東縁に土塁(幅2.5m・高さ0.5m)を設けている。

< G 地点 >

G地点には尾根筋にそって、一部に鉤状の土塁をもつ3段ほどの曲輪が設けられている。

<H地点>

H地点には2段の曲輪と土塁・豊堀が構築されている。上段の曲輪は12×35mを測り、北西縁に土塁、南東斜面に2条の豊堀(幅4~6m・長さ35~39m)を設けている。

下段の曲輪は11×32mを測り北側に土塁(幅3~4m・高さ1.5m)、南側に長い豊堀(幅6m・長さ40m)、北西尾根に長い土塁(長さ43m)を配置している。

H地点の南側には大きな谷が入っており、「南側土塁」はここで終わるようである。

「南側土塁」は「北側土塁」とは異なり、尾根筋に土塁線の他、広い曲輪や土塁・豊堀などを使った虎口空間が付随している。特に虎口らしい遺構はC地点とF地点に顕著にみられるが、何れも西側を向いているように思える。

西桂見の土塁(南側・北側土塁)は、どうも尾根筋に沿って湖山池から南側に、ほぼ連続して構築されているようである。筆者は『鳥取城調査研究年報』(第4号)で、「鹿野方面から繰り出すであろう毛利勢を食い止めるために、秀吉が構築したもの」と考えたが、その見解は「南側土塁」の調査後も変わっていない。

管見では、西桂見の土塁を秀吉が構築したことを裏付ける史料はない。しかし『信長公記』には、天正9年6月25日の項に「羽柴筑前、彼の山(帝釈山「太閤ヶ平」)へ取り上り、是れより見、下墨み、即ち、この山を大將軍(=信長)の居城に拵え」「(芸州からの)後巻の用心に、後陣の方にも堀をほり、堀・尺をつけ、馬を乗りますはし候へども、射越の矢にあたらぬ如くに、まわれば二里が間、前後に築地高々とつかせ、其の内に陣屋を町屋作りに作らせ、夜は手前手前に篝火たかせ、白中の如くにして、廻番丈夫に申しつけ」と記され、また同8月13日の項には「芸州より、毛利・吉川・小早川、後巻として罷り出づべきの風説これあり。」「今度、毛利家人数後巻として、罷り出づるに付いては、信長公御馬を出され、東国・西国の人數、膚(はだへ)を会せ、御一戦を遂げられ、悉く討ち果たし、本朝滯りなく御心一つに任せらるべきの旨(の)上意にて、」とも記されている。天正9年段階では、秀吉が「太閤ヶ平」を信長本陣として普請し、周到に鳥取城を包囲させ、鳥取城の救援のために毛利勢が繰り出した場合には、信長自ら出陣し、毛利軍を完全に殲滅させようとしていたことが分かる。そのために後陣の方にも堀を掘らせ「まわれば二里が間」(二里四方カ)に築地(土塁)を築かせたようである。身勝手な見方かも知れないが、鳥取から2里四方となれば当然桂見付近に到達し、そこに築地(土塁)を築かせたものと解釈してはいかがであろうか。そのように考えると、西桂見の土塁は秀吉の勢力範囲の西縁に築城されたことになる。

文献的解釈はともかく、湖山池の南側の尾根に数キロの土塁線を構築することは、織田勢が毛利の大軍を迎撃し、総力戦を展開するためには不可欠の防衛ラインであったと理解しておきたい。

2. 毛利氏の陣城群

<大崎城>(気高町奥沢見)(第5図)

天正9年段階の秀吉の因幡攻めに対する毛利氏の付城(陣城)としては、勝山城(気高町勝見)・泊城(湯梨浜町園)・大崎城(気高町奥沢見)がよく知られている。天正9年6月鳥取城に籠城していた吉川経家が、今後の戦況の見通しを述べている中に、秀吉が因幡に進攻すると、まず勝山城・泊城・大崎城などの付城を攻撃するであろう(「勝山・泊・大崎其の外の付城あまた一着すべく候」)こと予想している(吉川経家書状『石見吉川家文書』)。現に、秀吉方の細川藤孝の水軍(松井康之の水軍)は9月16日泊城を攻撃した。その時泊港には毛利方の船団64隻が停泊しており、毛利方の多数の軍勢が討ち取られ、その船団は破壊された。この救援に大崎城から軍勢を派遣したが松井水軍に敗れ、大崎城の山下は焼き払われている(織田信長黒印状『細川家文書』)。

大崎城は気高町奥沢見の日本海に面した丘陵、標高93.2mに所在する。城は土塁囲みの主郭から2方向に延びる尾根に連郭式に曲輪を配置し、通路空間でもある南側に長い土塁と豊堀を構築した縄張りである。また、海側(北側)の斜面に細長い曲輪を多数設けているのも特徴的である。

主郭1は東西約28m・南北約20mを測り、土塁に囲繞されている。土塁は南側が規模が大きく、幅約4~7m・

高さ約0.5~1.5mを測り、西南隅は櫓台であったかも知れない。西・北・東側の土塁は、幅約3~4m・高さ約0.5~0.7mを測る。虎口は南西隅と東側(幅約2m)に設けている。

主郭1の南下約4.5mには幅3mの帯曲輪を構築し、北側の尾根には幅の狭い曲輪群を配置している。

主郭1の東側には、10段程の切岸のしっかりした曲輪群を配置している。曲輪2は20×18mを測り、北側に土塁を構築している。曲輪3は14×14mを測り、曲輪2との段差は約2.5mある。曲輪4は15×11mあり、切岸に石積(約3m)がみられる。曲輪5は16×11mを測る。曲輪6は17×13mを測り、曲輪5との段差は約3mである。曲輪7は14×11mを測り、曲輪6との段差は約4mを測る。曲輪8は20×11mを測り、曲輪7との段差は約6mを測る。曲輪8と主郭1との間には幅3~3.5mを測る堅堀状の通路とそれに沿って幅約3~5m・高さ約0.5~0.7を測る土塁が設けられている。また曲輪8の南側には、現状で幅6mの虎口を構築している。

主尾根の曲輪群の北側(海側)には細長い曲輪群が連続している。主郭1の北側尾根の曲輪群と同じ様相をしており、海からの物資運搬のための曲輪群であろうか。

史料的にいえば、このような遺構全体が天正9年段階のものであろう。しかし、曲輪2~8の曲輪群は小規模で段差も低く、新規築城された付城とは考えにくい。新しい様相をしている縄張りは、主郭1の土塁と2ヶ所の虎口、城の南側に設けた堅堀と土塁をセットにした通路と虎口である。また、土塁の使い方は鳥取城周辺の織豊系陣城とは異なるようである。従って、大崎城は織豊勢力との抗争の中で、在地勢力の城を毛利勢が土塁と堅堀などによって改修したものと推察される。

ところで、但馬にも毛利方が新規築城した賀嶋城がある(第6図)。賀嶋城は日本海に突き出た陸繫島に立地しており、竹野地域では特異な縄張りを有している。城はほぼ単郭(東西25m・南北44m)で、土塁(幅4~5.5m・高さ1~1.5m)が取り巻き、北側に堀切・堅堀・南側に虎口を構築している。

天正8年(1580)5月吉川元春が都野越中守・弥四郎父子に送った書状の中に、「鹿島の儀、普請彼是相調え油断無く候由、肝心此の事に候」とあり、鹿島(城)が竹野に於ける毛利方の拠点(陣城)として築城されている。都野父子は天正7年(1579)頃から吉川元春の名代として但馬に出兵(常駐)し、奈佐日本助・垣屋豊続らと共に対織田作戦を展開していた。吉川元春は織田勢の攻勢に対して、竹野賀嶋城を但馬奪回作戦の橋頭堡としていたようである。

因幡・伯耆などの日本海側の城の縄張りを検討した訳ではないが、但馬の事例等から考えると、大崎城の土塁をもつ縄張りは吉川勢による改修とみることができよう。今後、因幡・伯耆方面の「毛利の付城」とされている城の縄張りの検討が必要である。

なお、勝山城は戦国期以前の城を畝状堅堀によって改修・補強した縄張りをもつ。この勝山城の場合は、毛利勢によって、畝状堅堀による付城としての改修がなされたものと思われる。勝山城は大崎城とは大きく縄張りが異なることを考えれば、毛利系の陣城は土塁と畝状堅堀による改修という、2系統があるのかも知れない。

3. 高石垣をもつ近世城郭

因幡における高石垣をもつ近世城郭については、すでに吉田浅雄氏や角田誠氏らの縄張り研究がある。また鹿野城については、昭和56年(1981)の段階で詳細な研究報告(『鹿野城跡調査概報』(鹿野町教育委員会・鹿野城跡調査委員会)がなされている。ここではそれらを参考にしながら、縄張り調査の報告をする。

(1) 景石城・子持松ノ砦(所在:用瀬町用瀬)(第7図・折込み)

景石城は千代川右岸、用瀬集落東側、標高320m地点に景石城、標高325m地点に子持松ノ城が所在する。

城は南北朝期の『太平記』にみえ、延文年間(1356~61)播磨の赤松世貞・同則祐が因幡の景石・揉尾・塔尾城(智頭町)などを攻略している。また室町期には、因幡守護山名氏に属する国人(用瀬氏力)の城であったらしい。景石城は、天正8年羽柴秀吉の第一次因幡攻めの時に攻略され、秀吉は磯部兵部大輔(豊直)を守備させた。磯部氏は但馬の朝来郡磯部谷の国人で、秀吉の但馬進攻の時その麾下に入った人物である。その後景石城は毛利方の山名豊国に奪回され、同年10月には吉川氏の家臣が在番していたようである(吉川元春書状『萩藩閥閱録』)。天正9年(1581)の秀吉の第二次因幡攻めの時、磯部氏は軍功をあげ、智頭郡半分を与え

られて再び景石城主となった(羽柴秀吉捷書『間島文書』)。

その後、磯部氏は若桜鬼ヶ城の木下重堅の与力となり、3,000石を与えられた。慶長5年(1600)の関ヶ原の戦に際して、磯部氏は木下氏と共に西軍に属したため除封となった。慶長6年(1601)家康から智頭・八東二郡を拝領した山崎家盛が若桜鬼ヶ城に入部すると、その支城として家臣が配属された。元和3年(1617)の池田光政の鳥取入部によって、廃城となったという。

<子持松ノ砦>

標高約320mに所在する主郭1は東西15m・南北10mを測り、その背後(南東側)に堀切(土橋)・豎堀を構築している。堀切は幅約10m・深さ5mあり、豎堀は幅3m・長さ10~13mを測る。また、主郭南側の小曲輪4は9×4mを測る。

主郭1の北側の尾根には、堀切・豎堀と4段の曲輪を配置している。堀切は幅約10m・深さ約5mあり、豎堀は幅約3m・長さ8~10mを測る。曲輪2は7×24mを測り、曲輪3は5.5×7mを測る。曲輪3の東西斜面の豎堀は、幅約2.5~3m・長さ9~11mを測る。

主郭1の西側尾根には、堀切・豎堀と4段程の曲輪を設けている。堀切は幅10m・深さ約5mあり、豎堀は幅4~4.5m・長さ19~23mを測る。また、主郭北西斜面の豎堀は幅4m・長さ15mを測る。曲輪5は7×8mあり、低い土塁が堀切側に鉤状に構築されている。曲輪6は8×6mを測る小曲輪で、曲輪5との段差は約2mしかない。尾根鞍部の曲輪7は5×11mを測る。曲輪8は7×11mの小曲輪である。

城は、主郭の背後を堀切(土橋)・豎堀で遮断し、主郭から二方向に延びる尾根に小曲輪群を配置し、さらに堀切・豎堀や畝状豎堀などを構築して補強・改修したものである。改修時期は戦国末期で、その起源は南北朝期から室町期であろう。織豊期の改修はみられない。

<景石城>

城は標高325mに位置する主郭周辺に高石垣を構築し、そこから四方向に延びる尾根に小曲輪群を配置した縄張りである。

主郭1は東西32m・南北10mを測り、南側と東側に平虎口を設けている。石垣は曲輪を全周していたものと思われるが、北側から西側の石垣(高さ約4~4.5m)は破壊されている。北西隅の張出部には櫓台があったであろう。東側の石垣は高さ1.2mを測る。

曲輪2はほぼ台形で、東西11m・南北13mを測る。東側の石垣は崩れているが、石垣は全周していたものと思われ、現状で高さ4~4.5mを測る。

曲輪3は東西約13m・南北約32mを測り、北西隅と南西隅に小規模な櫓台を構築している。石垣の高さは西側で約4.5m、南東側で3.3~4mを測る。また曲輪3の東斜面に構築された曲輪4は16×9mを測り、石垣を巡らせている。

曲輪2の北東尾根には、岩盤を掘り込んだ浅い堀切・豎堀と6段程の曲輪が配置されている。曲輪群は小規模で、曲輪5は4×9m、曲輪6は5×6m、曲輪7は8×16m、曲輪8は11×24mを測るに過ぎない。

主郭1北側の尾根には数段の小曲輪が認められるが、大きいもので7×6mである。また曲輪3の南尾根にも4段の小曲輪があるが、最大で7×6mを測る。

曲輪3の北西尾根には9段の曲輪が確認出来、曲輪9~12は登城路を兼ねている。曲輪9は13×6mの小曲輪であるが、西側に石垣をもつ。曲輪10は7×7mほどの小曲輪である。曲輪11は17×17mを測り、石列がみられるので、当所は櫓台をもつ石垣が巡らされていたのかも知れない。曲輪12は8×19mを測る。

曲輪12から直線距離で約100mほど離れた所に、岩盤を掘り込んだ堀切・豎堀と5段程の切岸の甘い曲輪を配置している。堀切は幅6m・深さ約2m、豎堀は大規模で幅6m・長さ46mを測る。また、曲輪13は9×23m、曲輪14は16×5mを測る。

景石城の高石垣をもつ主要部は山頂の曲輪1~3で構成されているが、石垣は4~4.5mと比較的低く、隅角部の石垣も算木積とはなっておらず、直線的で反りはみられない。また、曲輪の虎口も平入りで枠形ではない。従って主要部の石垣は天正期前半、天正8~9年頃の普請と思われる。その後の改修はなかったであろう。

景石城主要部の周辺には尾根筋に小曲輪群がみられるが、これらの遺構は南北朝から室町期の様相を呈し

ている。城は戦国期末期に堀切・堅堀による若干の改修を受けており、子持松ノ城と同時期に機能していたものと思われる。その後、織豊期に山頂部を中心にして石垣による大改修がなされたものと推察される。尚、景石の石垣は破城されていると判断されるが、その時期は元和の一国一城令以降の池田光政段階と思われる。

＜磯部氏居館跡＞(通称「御屋敷」)

磯部氏の居館は、景石城と子持松ノ城から西側に延びる尾根に挟まれた谷部、標高約150m地点に所在する。

居館の中心部は広い曲輪1で、東西約45m・南北約56mを測る。谷側(北側)の石垣はかなり崩れているが、北西石垣は高く現状で約5mある、隅角部は算木積にはなっておらず、シノギ積のようである。曲輪1の前面(西側)には3段の石垣が構築されている。何れも建物が立つような広さではなく、曲輪2は幅5m、曲輪3は幅7m、曲輪4は幅12mを測る。石垣の高さは約2~3mを測る。曲輪4の石垣は小ぶりで、後世に積まれたものかも知れない。現状では、曲輪1~4の間に明確な虎口はみられなかった。

曲輪4の前面(西面)には幅約7mを測る通路が設けられているが、その南北に3段ずつ曲輪を構築している。西からの進入者を迎撃するための曲輪群であろう。北側の曲輪5は13×8m、曲輪6は11×6m、曲輪7は10×8mを測る。また南側の曲輪8は8×17m、曲輪9は25×21m、曲輪10は20×15mを測る。

磯部氏の居館部は大きな石を使用しているものの、石垣の積み方は稚拙であり、景石城の主要部の石垣と同時期に築城されたものと思われる。しかし、居館への通路部の小曲輪群や居館背後の尾根筋の小規模曲輪群などを勘案すれば、子持松ノ城時代の古い居館もここに所在していたことも考えられ、戦国期まで利用されていた居館部を磯部氏が石垣の居館に改修した可能性もある。

なお磯部氏時代の居館からの登城路は、居館から谷をわたり、堀切・堅堀に至る現在の登山道に繋がっていたものと推察される。

(2)鹿野城(所在：鹿野町鹿野)(第8図・折込み)

鹿野城の縄張り調査は、前記『鹿野城跡調査概報』所収の「鹿野城跡遺構分布図」を活用させていただいた。山城部分の調査は遺構分布図を手直ししながら実施したが、山裾の平城部分は不十分な調査しかできていない。

＜鹿野城史＞

鹿野城は河内川と水谷川の合流点、鹿野町の南側、標高152mの妙見山に所在する。城域は東西約300m・南北約350mを測り、山城部分と山下の水堀に囲繞された平城部分に分かれる。主郭部と山裾との比高は約100mを測る。

鹿野城は因幡から伯耆方面へ向かう内陸の幹線道路の要衝にあり、戦国期には「因伯仕切りの城」として重要視され、合戦の舞台となった。以下、『調査概報』に依拠しながら、鹿野城史についてまとめてみよう。

鹿野城の文献的初見は天文13年(1544)初夏の頃で、出雲の尼子晴久によって攻略され、城主鹿野入道以下300余人が殺されたという。しかし、鹿野城はそれ以前にその存在が確認出来るという。

明徳2年(1391)の明徳の乱で、因幡守護山名氏家に従い京都二条大宮で戦死した志賀野八郎の名がみえる。永禄6年(1563)毛利元就の因幡侵入が開始されると、永禄7年(1564)7月元就と結んだ鳥取城主武田高信は毛利軍と伯耆衆の南條宗勝に鹿野城を攻略させた。武田高信は永禄13年(1570)毛利配下の久芳兵庫賢直に鹿野城下一保の在所を与えようとしている。

その後、毛利方の因幡防衛部隊(宇都宮家綱・湯原元綱・野村士悦・進藤豊後守ら)は天正8年5月まで鹿野城に在番した。天正元年(1573)には野村士悦が鹿野内300貫を給せられ、鹿野城の普請を行っている。

天正8年(1580)5月上旬、鹿野城は秀吉の第一次因幡進攻の際攻撃され、三吉・進藤らは鳥取城主山名豊国や森下・中村らの人質を秀吉に渡して開城している(羽柴秀吉書状『利生寺護国寺文書』)。同年夏秀吉は四人の守将(因幡の武田源五郎・丹波の赤井五郎忠家・石見の福屋彦太郎・出雲の亀井新十郎茲矩)を鹿野城に入れ、反毛利の最前線基地とした。

これに対し毛利方は鹿野に湯原元綱を派遣して攻撃させたが、鹿野城は落城せず、天正9年10月28日には、

鳥取城を攻略して羽衣石城などの救援に向かった秀吉が鹿野城に宿陣している。

鳥取城落城後、秀吉は亀井茲矩を鹿野城主として配属し、気多郡13,800石を給与した。慶長5年(1600)関ヶ原の合戦では亀井は東軍に属し、高草郡を加増されて24,200石となった。慶長14年(1609)年茲矩は家督を子政矩に譲ったが、慶長17年(1612)には加増され43,000石となった。慶長19年(1614)の大坂の陣の時には、鹿野城から1700人もの軍勢が徳川方で参戦したという。元和3年(1617)7月、政矩は石見国津和野に転封された。

その後、鹿野城には独立した城主は入部せず、池田光政の重臣日置氏、次いで寛永17年～寛文2年(1640～62)には池田輝澄(輝政の子)が居住したという。

<鹿野城の縄張り>

鹿野城は大きく、山城部分(山上の丸)と平城部分(山下の丸)に分かれる。

①山城部分

鹿野城は天守台の位置する主郭から二方向に延びる尾根に大規模な曲輪群を設け、2つの尾根に挟まれた谷部に小曲輪群を配置した縄張りである。

主郭1は方形で14×14mを測り、高さ約1.5～2mを測る石垣を巡らせている。石垣は河原石を使った野面積である。石垣の上部や隅角部などは取り崩されているようである。発掘調査によれば、5間四方(柱間約2m)の天守台であったようで、飾瓦・丸瓦・平瓦などを採集している。この天守閣は本瓦葺・入母屋造で重層の天守と考えられている。

曲輪2は主郭1を取り巻く帯曲輪(幅4～8.5m)となっており、主郭1との段差は約3mを測る。現状では、曲輪2の縁には石垣はみあたらぬ。発掘では、鰐瓦・平瓦・丸瓦・軒飾瓦片などが出土している。

曲輪3は10×7mを測る小曲輪であるが、斜面に石垣が張り巡らされている。やはり破城遺構と考えれば、曲輪3は小規模ではあるが石垣をもつ付櫓跡で、天守への入口を兼ねていたものと思われる。

曲輪4は18×21mを測り、曲輪3からの転石が散乱している。曲輪4は石垣普請か否かは不明であるが、表面観察では石垣ではなさそうである。

曲輪5は12×7.5mを測り、北と西斜面に整然とした石垣がみられる。石垣は高い箇所で約2mを測り、一部に角石が残存している。この曲輪は2段積の石垣であったのか、または破城によって曲輪が小さくなつたものかは判別できない。

曲輪6は36×13mを測り、西側に土墨(幅2.5～3m・高さ0.9m)を構築している。さらに北から西の斜面には石列が構築されており、西斜面には幅4m・長さ35mの堅堀を設けている。曲輪6の下段の曲輪9の裾部にはやはりかなりの転石がみられるので、曲輪6も石垣が巡らされていたかも知れない。なお、曲輪6には現在城山神社(妙見社)が鎮座しており、当時から城の鎮守として祀られていたものであろう。

曲輪7は23×33mを測り、現在貯水槽と展望台が建設されている。現状では石垣はみられないが、曲輪7の東下の曲輪13の裾部にはかなりの転石が散乱しているので、石垣が巡らされていたかも知れない。

曲輪8は6×12mを測る小曲輪で、石垣は構築されていない。

曲輪9は山城中最大規模で、東西約54m・南北約27mを測る。発掘では、南北の長軸8間×東西の長軸7.5間(但し南西隅3×2、北東隅1.5×3.5を欠く)に配列された礎石を検出している。南西・北東隅は元来から無かったものとすると、本礎石の配列は「南北6×東西6間」の礎石を本体にし、2×4.5間が西に、1.5×2.5間が北に付属する形になるという。瓦も平瓦・丸瓦・軒丸瓦(丸に一引両)・棟飾瓦(菊花紋)・軒飾瓦など多数の瓦が出土しており、曲輪9は山城部の中心的・日常的な居住区と考えられ、礎石建物は居住部分を含んだ本瓦書院建築が所在していたものと考えられている。

曲輪10は曲輪7下の急斜面に構築されており、18×5mを測る。また、その下の急斜面にも2段の小曲輪11(上段=4×4m、下段=3×3m)を設けている。

曲輪12は15×16mを測り、現在貯水槽が設けられている。現状では石垣はみられない。

曲輪13は41×13mを測り、瓦片も発見されている。曲輪の北側斜面全体に河原石の石垣列がみられ、当時は総石垣の曲輪であったものと思われる。

曲輪14は23×13mを測る曲輪で、通称「大平」と呼ばれている。現状は自然災害を伴った傾斜とみられて

いるが、曲輪14の前面(北側斜面)には帯曲輪と共に2～3段の石列がみられ、当初は段積みの高石垣が構築されていた可能性がある。稻荷神社の背後(南側)には数mにわたって高石垣が残存しており、櫓台状の石垣もみられる。山裾から曲輪14に入る虎口は不明確であるが、石垣が残存している東隅部に坂虎口を設けていたものと思われる。なお、曲輪14には西側から入る虎口も考えられよう。

曲輪14の西側には小規模曲輪群(15)が構築されているが、その性格は不明である。しかし、その曲輪群の西側尾根には2段になった石壘が構築されている。東側は高さ約2.5～3mほどの石垣であるが、西側は高さ4mを超える河原石の石垣が構築されている。この石壘は、西側の防御性を高めるために設けられたものであることは明白である。

鹿野城は石垣をもつ近世城郭であるが、曲輪配置は連続性がなく分散的であり、小曲輪群もみられるので、築城起源は南北朝期であろう。戦国期にも曲輪の拡張と共に堅堀などによる改修が加えられている。特に、主郭から流山に至る尾根鞍部の堀切・堅堀や曲輪6西側の堅堀などによる改修は戦国期であろう。また流山の尾根筋にも数条の堀切や堅堀が確認出来、流山も南北朝期から戦国期まで城郭として利用されていたようである。

鹿野城は、石垣の算木積が未完成、石垣の反りがみられない、曲輪の虎口が舟形ではなく平入りであること等を勘案すると、天正期後半の亀井茲矩による築城と思われる。また、曲輪・石壘などが全体的に破城されていることは間違いないが、その時期は元和の一国一城令後の池田光政時代と思われる。

尚、御殿風の書院造建物遺構や天守台遺構などの出土に伴う遺物などからは、山上を居住空間として利用していた可能性があり、今後検討をしていく必要があろう。

②平城部分

平城部分は現状では、鹿野中学校グラウンドとなっている通称「本丸」と鹿野中学校校舎となっている通称「二の丸」からなっている。

本丸は、南側の薬研堀から北側の稻荷神社の辺りまで内堀が巡らされている。本丸には南側と北側を防御する2つ大規模な石壘が構築されており、破城の跡が明確に分かる。石壘の形状から、南端の石壘には多聞櫓(「南櫓」)、北西端の石壘は隅櫓と多聞櫓(「北櫓」)が構築されていたものと思われる。またその直下に本丸への虎口が想定され、南櫓の東側と北櫓の山裾に虎口(城門)があったであろう。本丸の大手は北東側、二の丸へ通じる所に所在していたものと思われ、現状から考えると、内舟形の城門が想定出来る。

二の丸も堀に囲まれており、所謂馬出曲輪(角馬出)となっている。二の丸の西端には大きな土壘が残存しており、二の丸の縁全体に土壘が巡らされていたものであろう。二の丸の大手虎口は、曲輪の形状から判断して東側に構築されていたものと思われる。また、搦手虎口は西側の土壘の南側に構築されていたであろう。両虎口には土橋と城門がもうけられていたものと推察される。

本丸に馬出曲輪が取り付く構造は関東地方や東海地方に集中し、西日本には殆どみられない。馬出をもつ城は、弘前城(青森県)・米沢城(山形県)・土浦城(茨城県)・高崎城(群馬県)・川越城(埼玉県)・村上城(新潟県)・大垣城(岐阜県)・広島城(広島県)など多数あったが、いずれも明治の廃城後取り壊され、現存例は佐倉城(千葉県)・名古屋城(愛知県)・篠山城(兵庫県)などわずかであるという(三浦正幸『城のつくり方図典』小学館)。馬出は丸馬出と角馬出の二種類あるが、佐倉城・名古屋城・篠山城は何れも角馬出である。名古屋城の場合は本丸の内舟形虎口に馬出が取り付き、篠山城の場合は三の丸の内舟形虎口に馬出が取り付いている。馬出は曲輪の防御性を一段と高めるために導入された施設で、名古屋城では慶長15年(1610)、篠山城では慶長14年(1609)、佐倉城の場合は慶長16年(1611)頃築造されている。

鹿野城の場合は本丸に角馬出(二の丸)が取り付く構造と推察され、上記馬出の事例からすると、平城の築城時期は慶長期後半となろう。しかし、「王舎城図」(『因州記』所収、1861年)では二の丸から本丸の中程に入る大手道ではなく、二の丸の両端から本丸に入る構造となっている。今後検討を要する問題である。

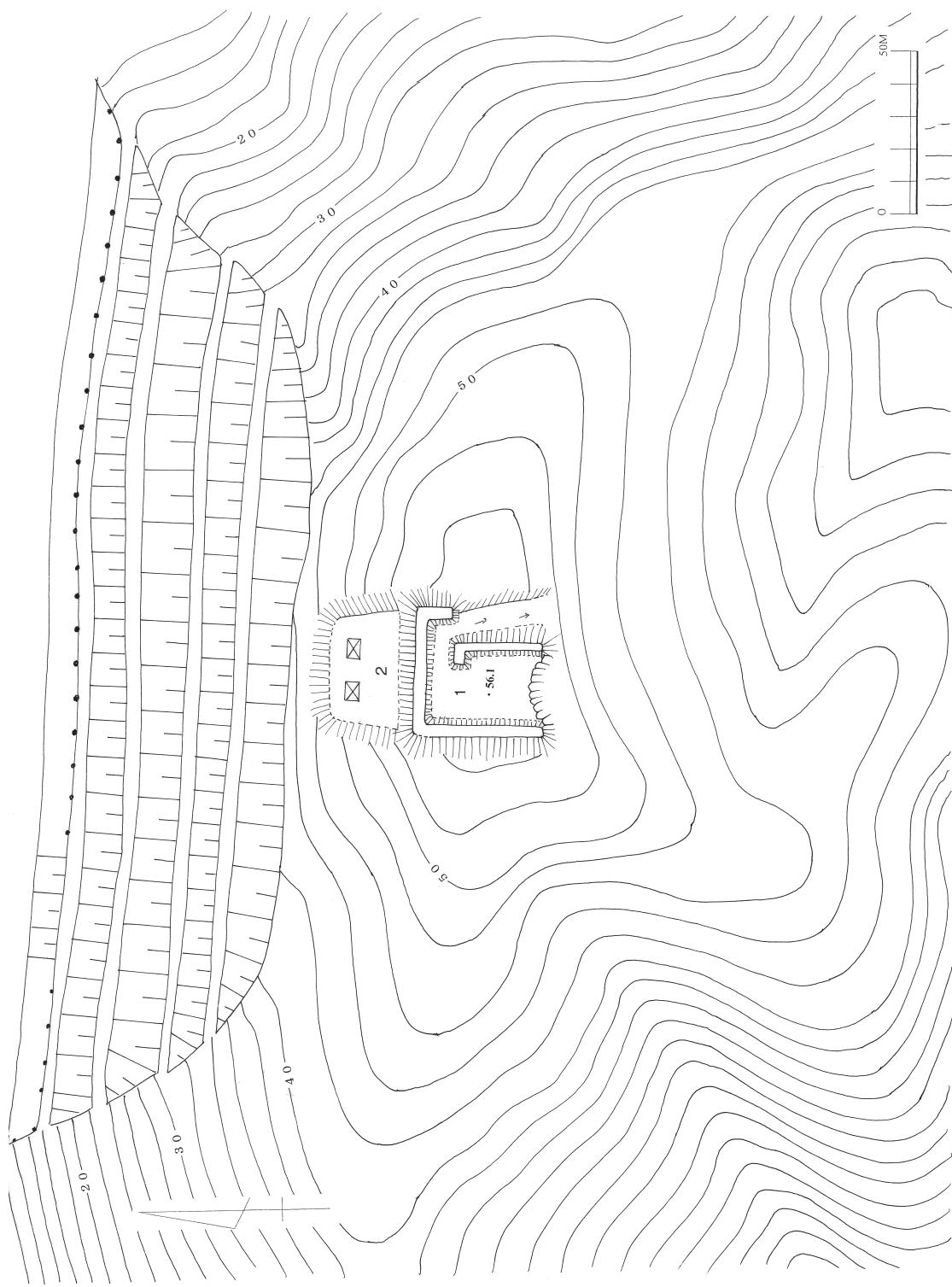
ところで、鹿野城には慶長17年(1589)の「亀井家分限帳」に「御西丸様」とあり、西の丸が存在したようである。この西の丸について『調査概報』では、「池田石入公こと輝澄が隠棲した現在の光輪寺一帯」を想定している。西の丸に堀を巡らせていましたかどうかは不明である。

なお、山下の平城部分も石垣全体が破城されており(正保元年の破城とされている)、山城部分の破城遺構

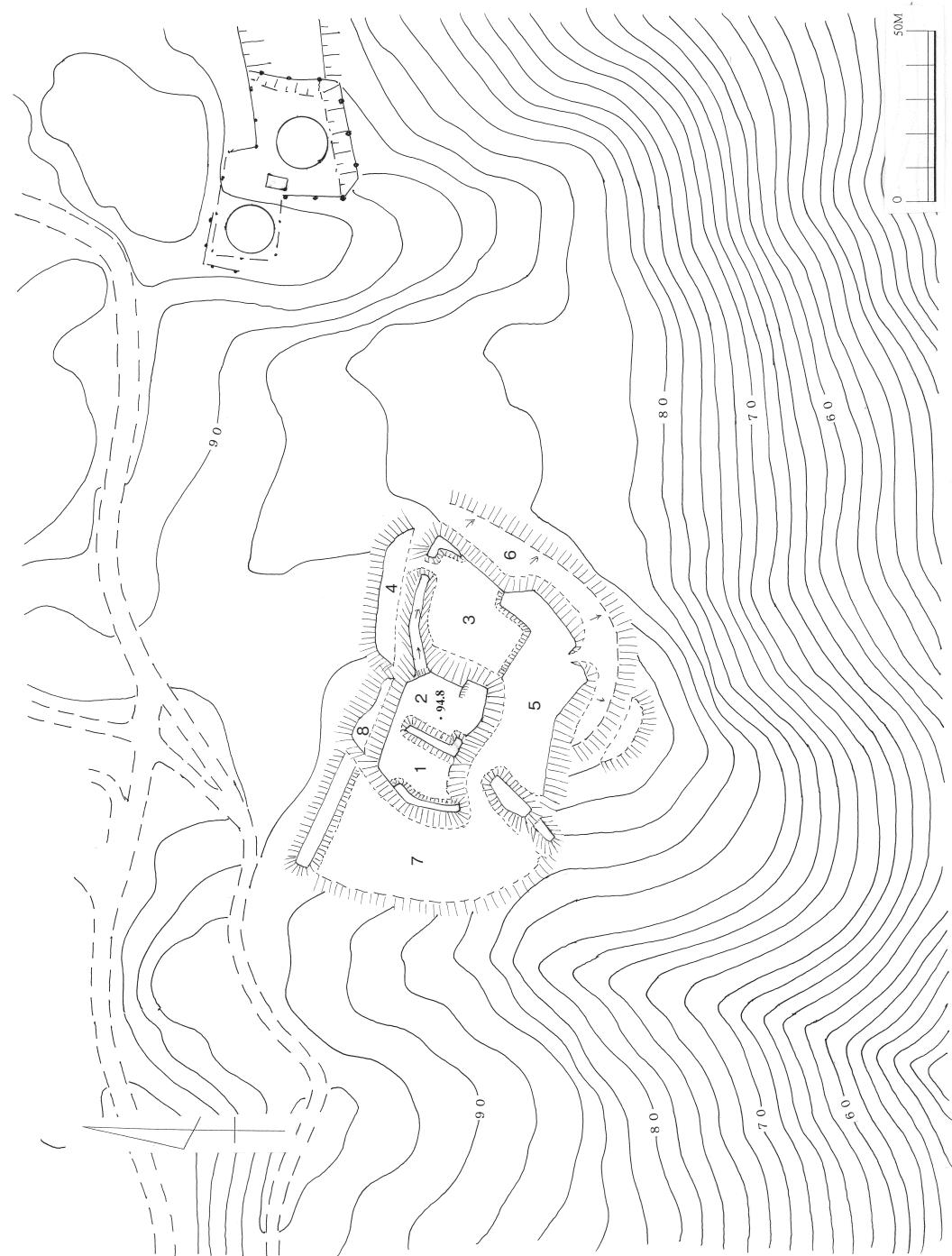
と共にその実相を究明していくことによって、鹿野城の実態解明が進捗していくものと思われる。

【参考文献】

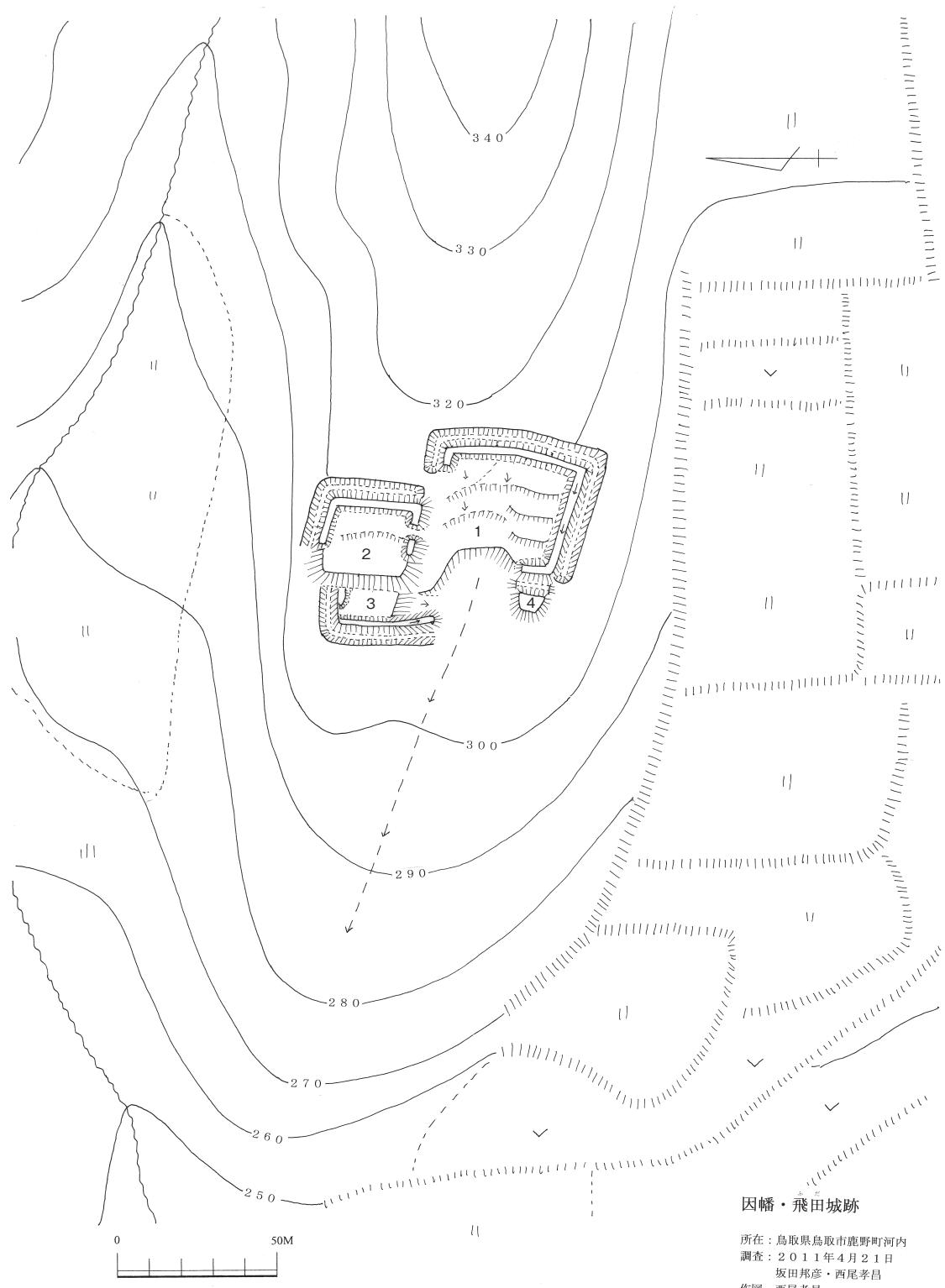
1. 『鹿野城跡調査概報』鹿野町教育委員会・鹿野城跡調査委員会 1981年
2. 『日本城郭体系14(鳥取・島根・山口)』新人物往来社 1980年
3. 『鳥取県の地名』(日本歴史地名体系32)平凡社 1992年
4. 『鳥取県中世城館分布調査報告書・第1集(因幡編)』鳥取県文化財保存協会 2002年
5. 『豊岡市の城郭集成 I』(竹野町・城崎町・旧豊岡市)豊岡市教育委員会 2012年
6. 『因幡若桜鬼ヶ城』城郭談話会 2000年
7. 三浦正幸『城のつくり方図典』小学館 2005年
8. 桑田忠親『改訂信長公記』新人物往来社 1989年
9. 『織田 vs 毛利－鳥取をめぐる攻防－』鳥取県 2007年
10. 『天正九年鳥取城をめぐる戦い』鳥取歴史博物館 2005年
11. 『鳥取城調査研究年報』(第5号)鳥取市教育委員会 2012年
12. 『鳥取城調査研究年報』(第4号)鳥取市教育委員会 2011年



第1図 八幡山の陣城（伝・三好信吉陣所跡）（1/2000）

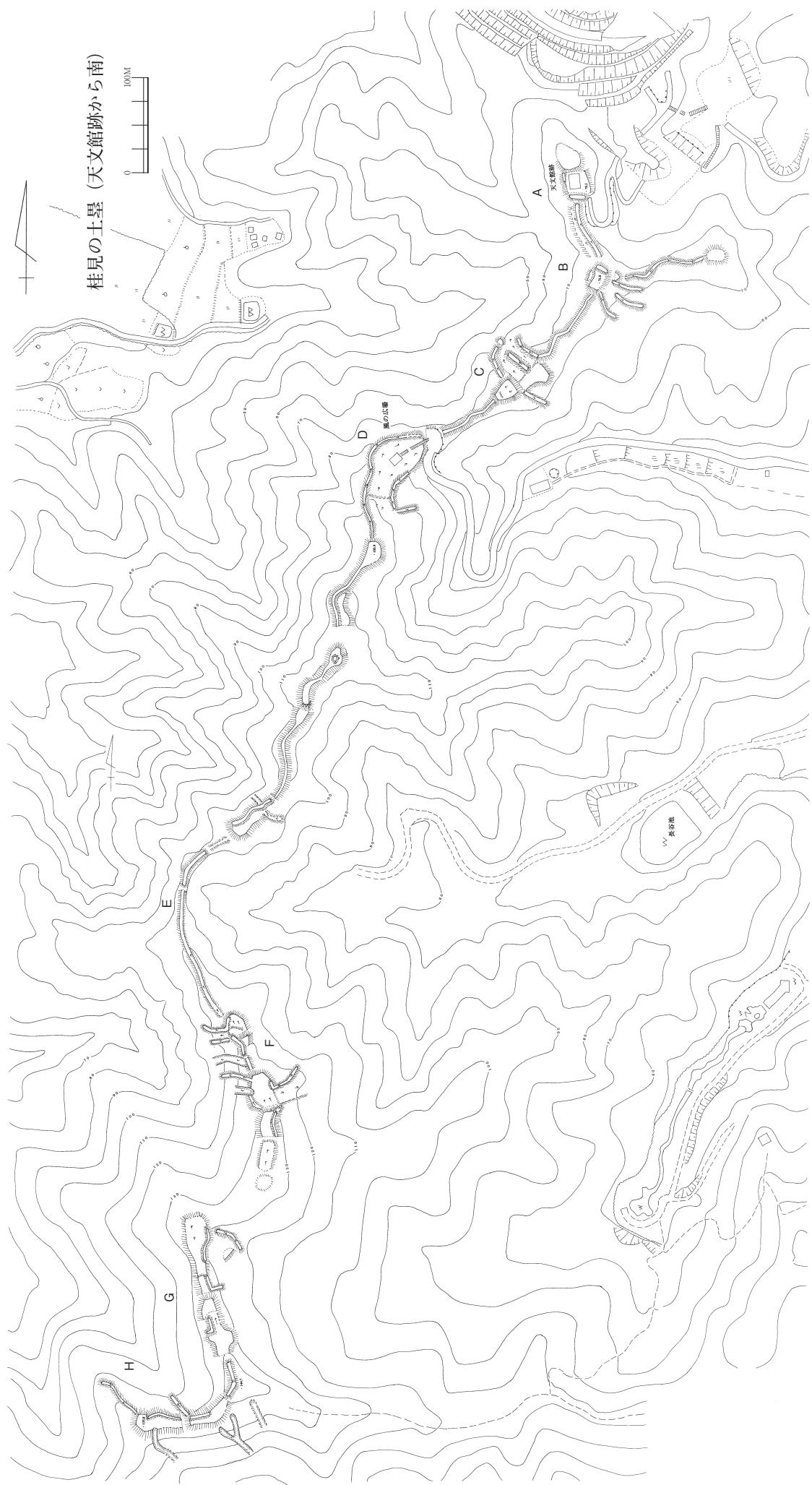


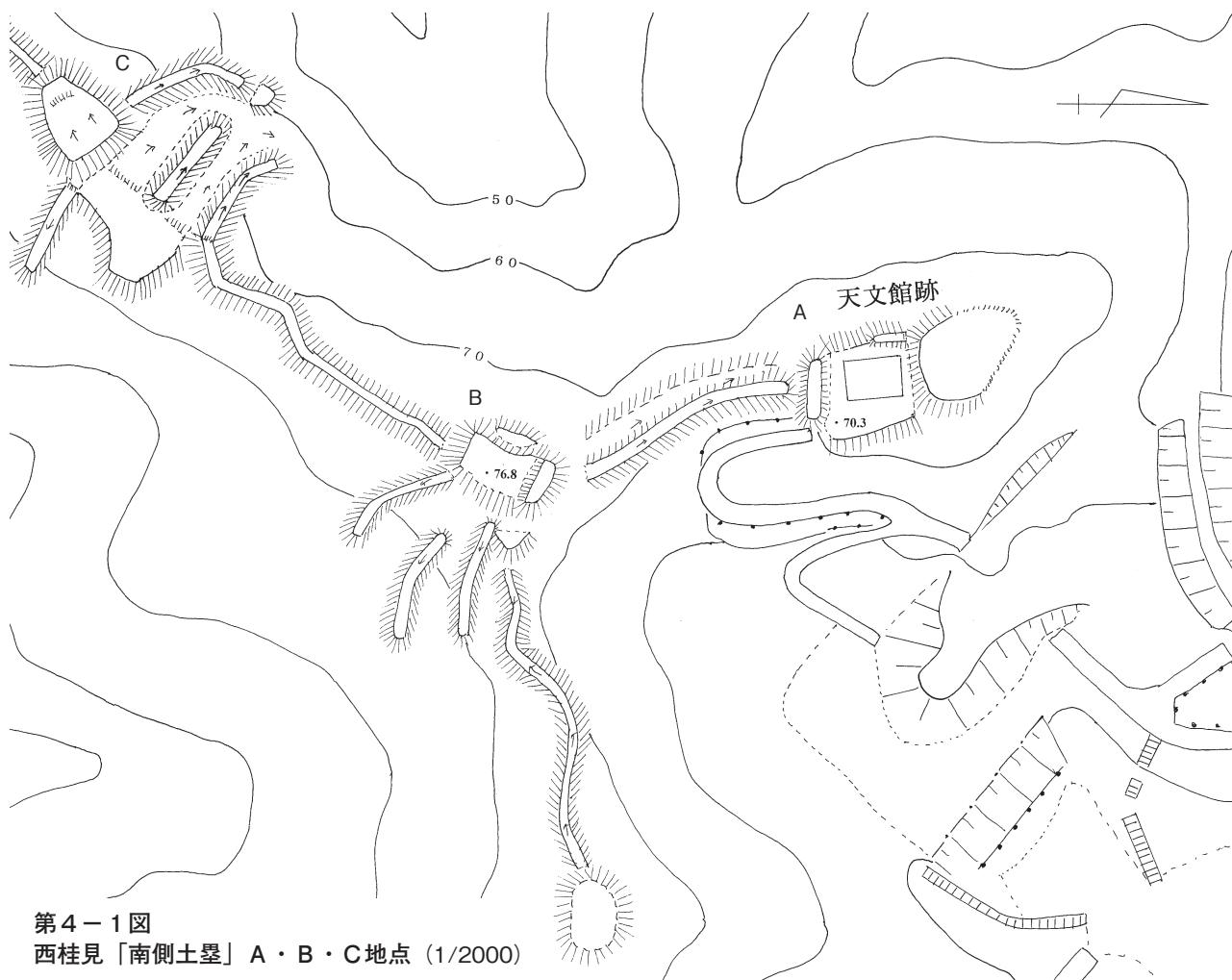
第2図 中ノ郷中学校北側の陣城 (1/2000)



第3図 因幡・^{ひだ}飛田城跡 (1/2000)

第4図 西桂見「南側土壘」全体図

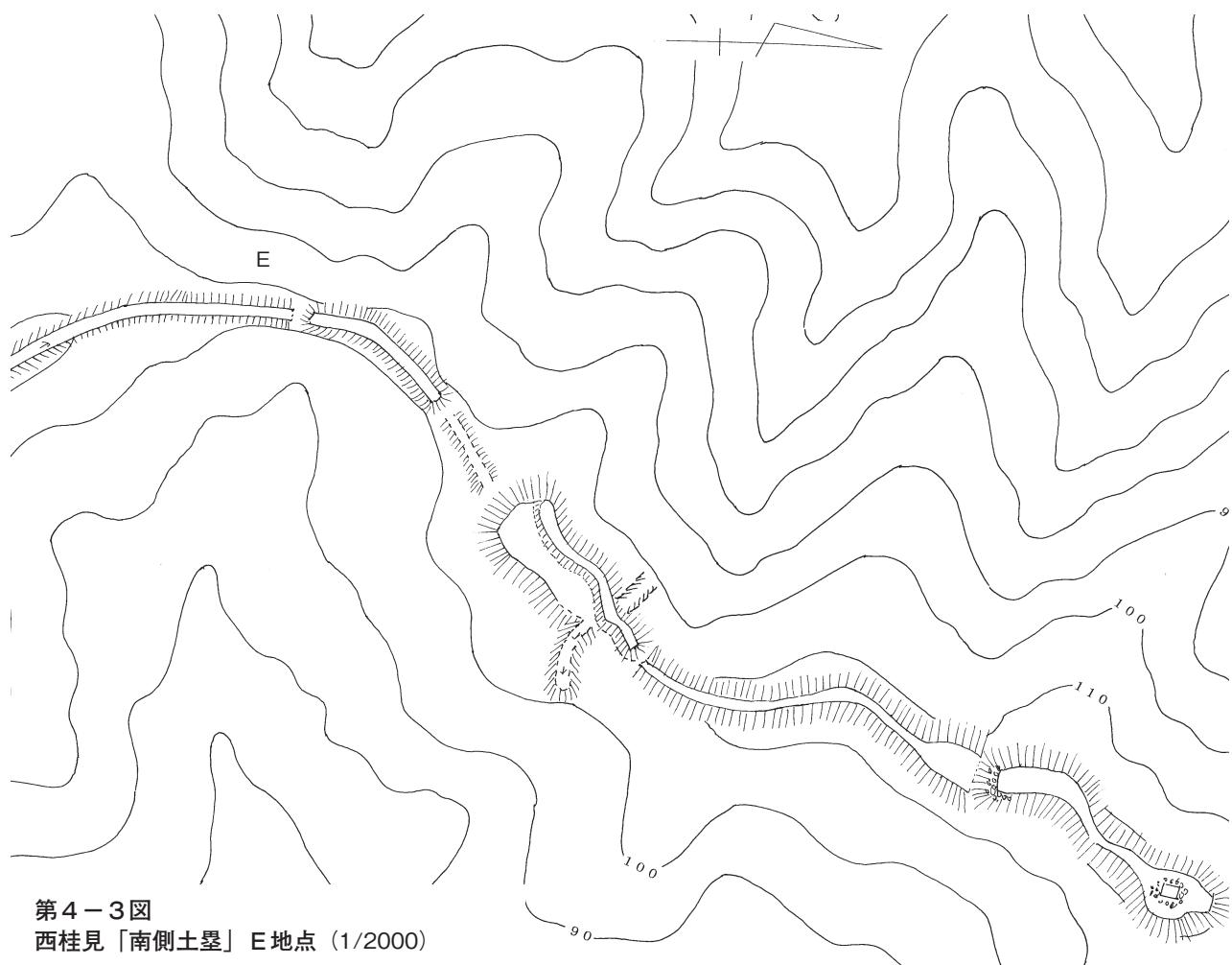




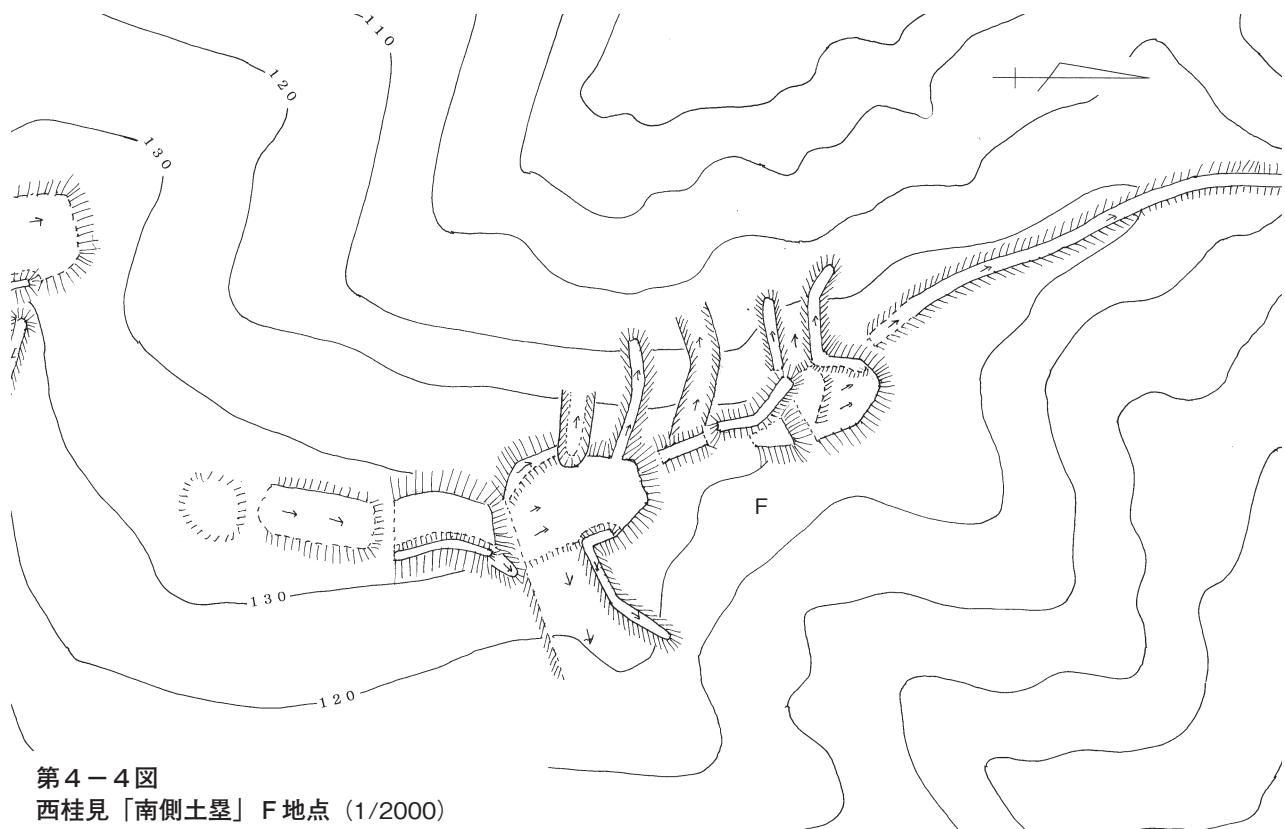
第4-1図
西桂見「南側土塁」A・B・C地点 (1/2000)



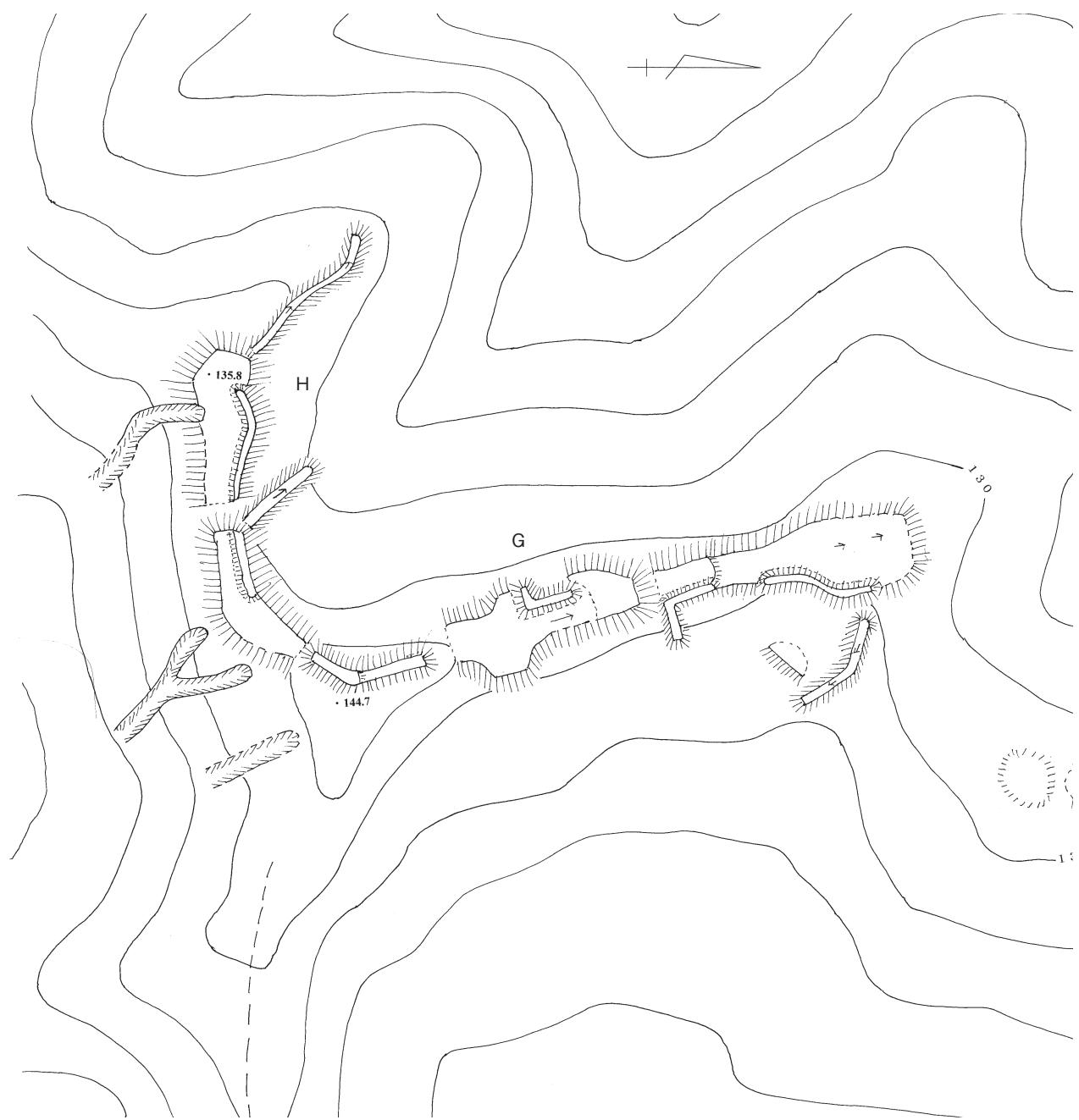
第4-2図
西桂見「南側土塁」C・D地点 (1/2000)



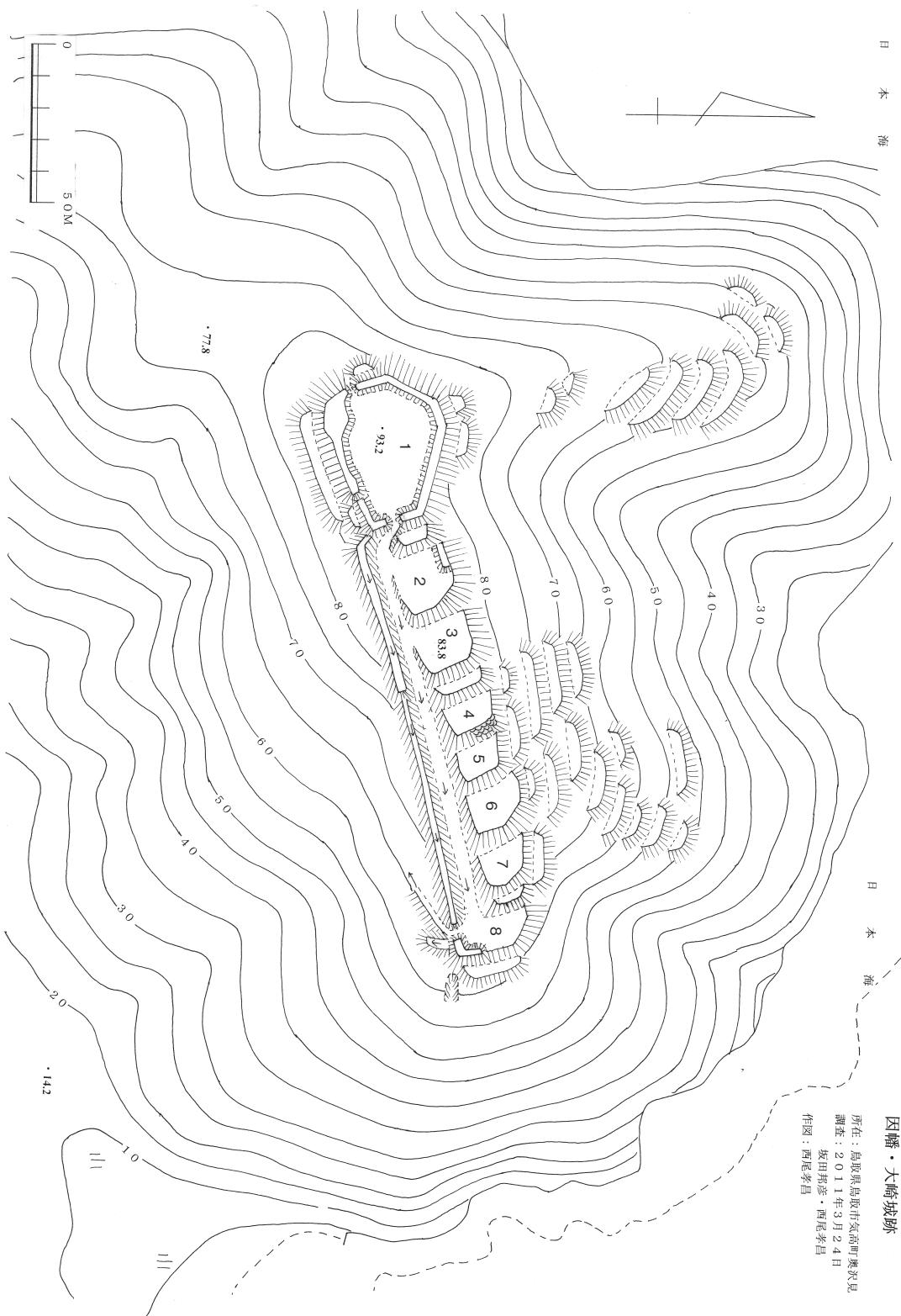
第4-3図
西桂見「南側土壙」E地点 (1/2000)



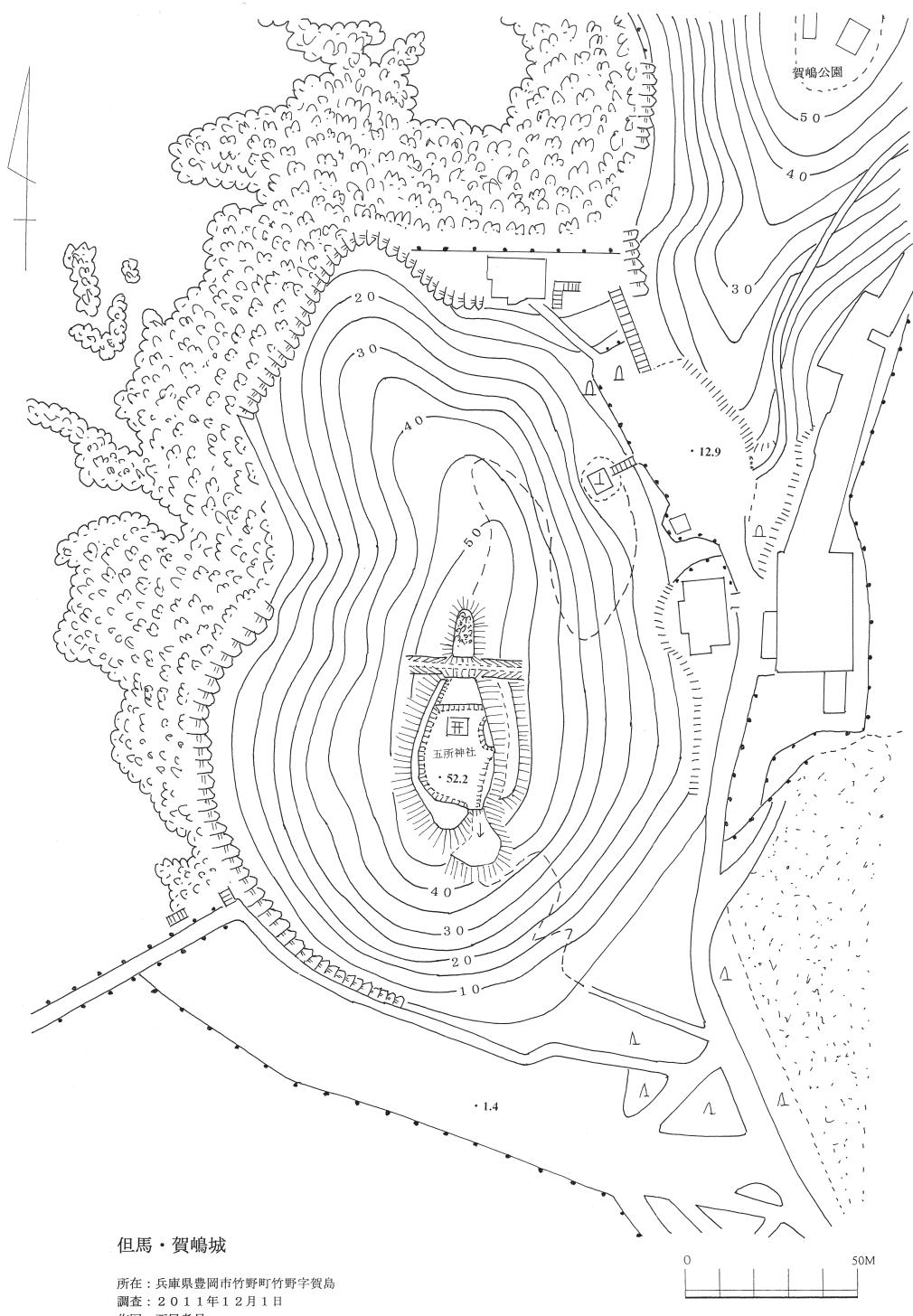
第4-4図
西桂見「南側土壙」F地点 (1/2000)



第4-5図
西桂見「南側土塁」G・H地点 (1/2000)



第5図 因幡・大崎城跡 (1/2000)



第6図 但馬・賀嶋城跡 (1/2000)